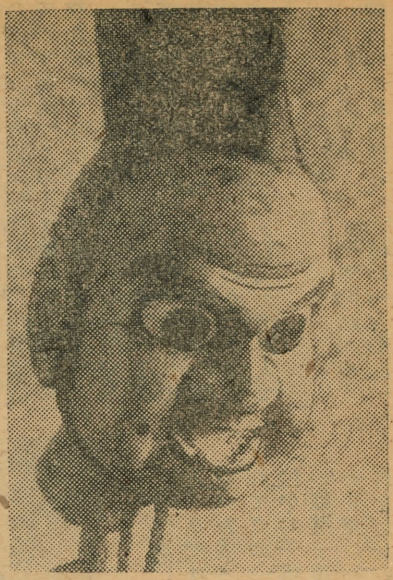
人形師デコ忠

舟葉米久



寫眞は人形忠作三番叟頭

阿波の淨瑠璃人形師に就て少し紹介してみると、その人形師の最初の人は馬之脊駒藏といふ人で、明和の頃に淡路に生れもとは佛師であつたが住み、製作してゐたが、現今でも田舍の人形座にぽつ〳〵殘つてゐるが作品には相當いゝものがある。

卯之助＝鳴州の甥である。やはり牢の濱で人形を作つてゐた。

近藏＝これも鳴州の甥で文政頃の人、牢の濱で製作してゐたが兩人共いゝ作品はなく、古いものとして珍重されてゐる。

源兵衞＝文政の人で、德島佐古大谷に住んでゐた、この人の作品は仲々いゝものがあるがその發見がむつかしい。

後に人形遣ひとなり、大岡馬之瀨（德島市助任本町大岡馬之瀨）に住んで人形遣ひから更に人形作りとなつた人、作つたものを「馬之脊」ものといはれて名作を殘してゐるが仲々見當らず、珍重されてゐる、筆者に二個所藏してゐるが恐らく他にないものと思ふ。

鳴州＝天明頃の人で、阿波の撫養に生れて牢の濱（德島市藍場之濱）に

善平＝文政の人で德島の藏本に住んで仕事をしてゐたが、作品はほとんど發見されない。

美之助＝大黑屋といつて源兵衞や善平と同じ時代の人で、撫養大代に住んでゐた。その子大江榮松といふのがあり最近まで製作してゐたが高齡の爲めその子の武雄に三代目美之助を名乘らして一時文樂座の座附になつてゐた事があるが、現在では大代の自宅で製作してゐる年四十歳。

作兵衞＝濱藏とも呼び、德島縣名東郡國府町和田に住み製作してゐたがこれも文政頃の人である。

忠次郎＝名東郡國府町和田に住み、作兵衞の子で親子共「人形忠」と稱してその作多く有名であつた。本篇の主人公はこの人で一名「デコ忠」で有名であつた。後年人相見などにもなつたが、なかなか奇事逸話を澤山殘してゐる。

友藏＝忠次郎の子で人形師であるが、現在では伊豫に住んで佛像など作つてゐる。

常右衞門＝明治初年の人で名東郡國府町和田に住み弟の順右衞門と共に同所で製作してゐたが後年淡路に移り更

に上阪して大江順樂と稱して文樂の座付人形師となつた事があるが、製作にはあまりいゝのがない。

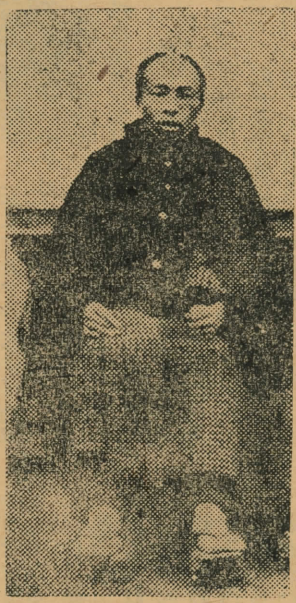
川島富五郎＝若松屋と言つて同じく明治初年頃より和田に住み作品には「人形富」の銘を入れ、仲々名作を多く殘してゐる。この人は最近名人といはれた天狗久の師匠である。

天狗久＝最近あまりにも有名で文化映畫「阿波の木偶」「淡路の人形芝居」宇野千代の小說「天狗屋久吉」で知られてゐたが、おしい事に昭和十八年十二月廿日八十六歳の高齡をもつてこの世を去つた、現在では三代目天狗久として孫の治氏が後をついで製作してゐる當年三十八歳（天狗久の二代目は治氏の父要氏でこの人は他家から養子に來た製作十年にして早逝してゐる）

天狗辨＝天狗久の甥であり弟子である、本名を近藤辨吉七十五歳だが名東郡國府町矢野で衰へもみせず熱心に仕事をつゞけてゐる、この人は文樂の座付人形師としてゐた事があり、最近まで番附の人形細工人として有名な人である。

× × ×

昔から名匠名人には奇事逸話が多く殘されてゐる通り、本稿の「人形忠」は通稱デコ忠で阿波人形師の代名詞とされて、多分の奇事や逸話を殘してゐる。彼「デコ忠」は本名を清水忠次郎といつて徳島縣名東郡國府町和田に生れた、彼には奇行が多かつたが、その一つに作品が賣れる毎に「福が入つたぞ」と連呼しながら村中を西に東に歩き廻り、子供等はこの聲を聞くと皆家



寫眞は人形忠翁

を飛び出し、忠翁の後からつけて來る。まだはいはいの出來かけた幼子までがお婆さんや、お爺さんにおんぶされてこの一群に混つて行くのである、村中の子供が大體揃つた頃忠翁は一軒の駄菓子屋に這入つて、そこの饅頭をあるだけみんな買つて了ふ、そしてそれを自分の最も信仰してゐる村端れの石地藏尊にお供をする、忠翁の來るのをここで待つてゐた子供等は一緒に合して、そこらの草をむしり手洗の水を替えたりして掃除が一段落になつた頃子供等を一列に並べその饅頭を與へるのである。こんな事が和田村では度々の事で、それだけ忠翁の人氣は大變なものであつた。

福が這入つたといふのは製作の人形が賣れその代價が入つた事で、荒彫りの人形でさへ當時その價額が百圓にもなつた。子供等から「先生々々」と呼ばれることを無上の喜びとし、又地藏尊は彼にとつては最も貴いものであつたのである。子供等が忠翁に物をねだる時には必らず「先生地藏さんの草を抜いて來た」といふと、彼はにこ〳〵しながら菓子を振舞つた。中でも彼が一番可愛がつたのは不具で白痴の「寶澤」（忠翁の名付）といふ當時二十七八歳の男で、彼はいつもこの男を背負ひ「ねんねする子に赤べべ着せて……」と唄つて、村中を歩き廻つた。白痴の寶澤は忠翁の背でよく眠つた。眠がさめると何に

かをねだり出す、「先生あれ買うてつか」ねだる時には必らず先生と呼ぶ、白痴ながらも彼の心情が判つてゐたらしい、ねだつて聞き容られない時は「コラデコ忠あれ買へ」とどなりつけるのである。

彼はこの白痴に新しい着物をよく着せた、和田の町中を探してもないやうな皮の立派な先皮付の高下駄をはかせたのも忠翁であつた。

忠翁の父も人形師で作兵衛といい、明治初年にある罪を犯して、讃岐の大阪越に追放されて居たが、郷愁の情押へがたく、ひそかに歸國してその名を清水と改め、銘だけは忠翁の名を用ひて人形を製作してゐた。その頃和田村には、常右衛門、須右衛門の兄弟の他に川島富五郎、など人形師は多かつたが、忠翁は斷然頭角を抜いてゐた、忠翁はまた子供の外に芝居が殊に好きであつた、これについて面白い話が二三ある。

彼は信富座（徳島市富田町）の常客として座中央の二ケの座席を年中買ひ切つてあるだけに相當人に知られてゐた、チョキン、チョキンと開幕の拍子木がなつて、觀衆の瞼は舞臺に集中される、觀衆のなかには美しい富街の繪妓が多數をしめて競艶の花を咲かせ、水も滴るばかり黑髪の香がたゞよつてゐる。

劇は進む、人は醉ふ、またゝきもしない一刻の陶醉境から解放されて幕が下ると、しばらく休憩の時間が續く、子供たちはこの休憩の御馳走を待ちかねて蒔繪の入つた重箱から海の幸、山の幸をさかみにかゝる。その垂涎の珍味の中に座の中央を占めた忠翁も金蒔繪を施した重箱を開き始めたのはよいが、中味は麥粉！おちらしである、忠翁はこのおちらしを、はねながらにぎやかにしやべりだしたから、口から麥粉が飛んで着飾つた晴着にかゝる、傍らの重箱にまで飛んで來る。失禮千萬なと顏をしかめて振返つて見るが、この忠翁は平然とすましてゐるので、にらみがきかない、惡意か無頓着か麥粉の飛散が甚だしくなるばかりで、みずみずしい髷にも飛びかゝる。初めは手拭を姉さん冠りにしてゐた客も拂ひきれない晴衣にかゝる麥粉に當惑し、やがては立ち上る騷ぎ、しかし彼は飽くまでも平然としてこの浪籍をくりかへす。美しい姐さんはぷつぷつ小言をいひながら遂にたまりかねて席を移してしまふ、忠翁は更に素知らぬ顏で滿員になつた場の中央を廣く占領して一日ゆつくり觀劇して歸るのであつた。

觀劇の奇談をも一つ、彼はまたおちらしの襲擊ばかりやるのでもなかつた。或る時はこんな事があつた。所は同じ新富座で觀衆が席を取つてゐると田舍の爺さんがやつて來た。持つて來た風呂敷包みから現れたのは便器、おまるである、爺さんがおまるを運んで來たことを知ると、先客達は逸卷きにして引きさがる、芝居半にその便器の蓋を取つた爺さんがつまみ出したのは穢物ではなくて、山海の珍味であつた、これを忠翁の觀劇法の一つでわざわざ新しいおまるを購めてゐたのである。

人形淨瑠璃は新しい新派劇や活動寫眞に壓せられて古典的となり、凋落の一途をたどつてゐた、併し忠翁の人形ばかりは高價に賞れた、それでも彼は常に貧乏で福がはいつて來ると、子供達に一錢饅頭の御馳走をする。

彼はまた夏になると必らず鮎喰川のほとりに出掛けて行き、馬をひく馬子にも大八車を引く小僧にも、百性にも、通るものを皆んな呼びとめて先づ一杯と砂糖水を御馳走するのを行事として繰りかへした。

忠翁は憐れな者を見ると、たまらなくなつて色々なものを與へた。蚊帳でも、着物でも何んでも無い者にやつてしまふ、それだけに金持を嫌つた。同行二人と書いた菅笠が通りかゝると、必らず呼び込んで白米一升を布施した。その頃和田村で米の飯を常食にしてゐた家は忠翁ともう一軒外に同じ人形師の川島富五郎くらいのもので、これに味をしめて來る遍路も毎日々々多かつた。

また忠翁は骨相學に造詣を持ち、その判斷は常に的中してゐるので、近郷近在より觀相を頼みに來る客も少くなかつた。人形製作にも骨相學が必要な處から研究したものであろう。家の戸口には「見料一圓に驚くものは入るべからず」と規定を掲げた。その頃の一圓だから相當なものだが、見料一圓のない者には反對に翁から一圓を與れる事がある。

ある時觀相の後で一圓の金がなくその旨を述べたところ反對に翁から一圓の金が與へられ、その上家に歸つても薪がなくて困つてゐると言へば、早速通りがかりの薪屋を呼び止めて車一杯をその人の家に運び込ませたことがある、客はすつかり驚いて謝るのだつたが翁は白い齒をむいて平然としてゐた。

同じ村に横山萬平といふ人がゐた、（一昨年高齡で亡くなつた）その萬平さんの家に古くから傳はる大師像があつた、肩も毀れ手が拔れぐろいぶしになつたものを發見した忠翁は何と思つたか足しゝげく茂平さんの家に通ひ、「たゞで直すと言わぬ、米四斗に炭四俵を持つて來るから直させてくれ」と再三頼んだ、「そんなに言ふのなら直させてやる」と云ふと、忠翁は喜こんで持つて歸つた。氣が向かないと何年經つても仕事をしない忠翁が一ケ月もたゝないうちに、このお大師像を綺麗に修理して持參して來た、そして約束だといつて彼れは嬉しげに米四斗と炭四俵を持つて來たのである。

翁の逸話はこうして數限りがなく、日頃信仰してゐた中津峰觀音の月詣りに限つて三里の道をお手車の人力車に乘つて行つたもので、その時は五十錢銀貨を澤山持參し自分の車によけてくれた人や荷車に對して「ヘイこれを」と車の上から五十錢銀貨を一枚づゝ與へて喜こんだ。

又ある時、四國札所の十七番井戸寺に詣つた時、門前の見すぼらしいいざりに米一俵をやつて、いざりは持つて行く事が出來ず三ケ月もそこで食つた話や、そうかと思ふと、遍路に百圓紙幣をやつて驚かしたり、兩親のない憐れな子供を何年も引取つて大きくしたりした。

國府町の鱗屋といふ小料理店で、忠翁が便所を出て手を拭くものがなく、かたわらの舞妓に何にか手拭をといつた所、舞妓は即座に「まアお爺さんこれでよければと……」いつて自分の美しい袖を差出した。忠翁はこれが氣に入つたといい後日十反からの呉服を贈つた話はあまりにも有名である。

忠翁が淨瑠璃人形の外に最も得意としたものは荒刻みの大黒像で、これを刻むには時刻を定め、齊戒沐浴した、また焙烙に浮世繪の三幅對のお福を畫くのも得意の一つで淨瑠璃の三味線も彈いた。

デコ忠はこうした奇事逸話を澤山殘して明治四十三年八十歳の高齡にて亡くなつたが、和田の人氣を一人で背負つた忠翁だけに葬儀の列は賑々しく何町も續き、そして子供達の樂しみが減り、浮世繪のぼうろくも次第に壞されて、今は幾枚も殘つてゐない。（筆者は阿波、淡路人形の研究家）